

態度・行動変容を促すスパイラル学習 －国際ボランティア概論の取組から－

■ 廣瀬 淳一（高知大学安全・安心機構）

1. 国際ボランティア概論－講義形態の模索

（1）テーマ設定と参加学生

この講義は全学部の学生が履修可能な2単位の共通教育科目であり、「国際ボランティアを切り口に社会と人のかかわり、利他性について学ぶ」ことをテーマに設定している。学生募集に当たっては、履修学生に、次の3点を伝えている。

- ① 専門知識や外国語運用能力は特に必要なし。自分で何かを得ようとし、自分で考え、周囲と共有しながら学び合える人を歓迎する。
- ② 好奇心旺盛な受講生を歓迎する。国際ボランティアの領域では、教育（初等教育、理数科教育、体育教育など）、保健医療（感染症対策、栄養指導など）、農業（果樹栽培、稲作など）、水産業（養殖、水産加工など）、文化・スポーツ（日本語教育、柔道、サッカーなど）、建築・土木（測量、GIS、設計など）、コミュニティ開発（観光、まちおこし、改善運動など）、行政・経営（システム開発、組織改善など）のように様々な能力が求められ、また人材が活躍している。
- ③ 将来、「国際ボランティア」を希望していなくてもかまわない。

以上のことから、この講義の受講生は外国や外国語、

国際ボランティアに必ずしも関心を持たない者が含まれる可能性がある。ただし、授業科目の主題は、次の3点であることから、学生には国際、ボランティア、課題解決に関する学びや取組が評価対象であることを伝えている（表1）。

- ① 国際ボランティアの基礎的知識を学ぶ。
- ② ボランティアを受け入れる側の社会（相手側）や文化を理解するとともに、ボランティアを提供する側（自分側）の人間が身に纏っている文化に気づくことができる。
- ③ 自他の人格を尊重しながらグループのメンバーと対話して、多様な視点から課題解決に取り組むことができる。

表1. 授業科目の到達目標

授業科目の到達目標	知識・理解	思考・判断	関心・意欲	態度等	技能(技法)・表現
国際ボランティアについて基礎的な知識を身に付ける	◎	◎			
ボランティアを受け入れる側の文化を理解するとともに、提供する側の人間が身に付けている文化にも気づくことができる。	◎	◎			
自他の人格を尊重しながらグループのメンバーと対話して、多様な視点から課題解決に取り組むことができる。		◎	◎	◎	○

（2）目標と学生へのメッセージ

シラバスでは学生に次のようなメッセージを送っている。

- ① 国際ボランティアとは何か。初学者のための概論。国際ボランティアが必要とされる背景、理論、国際ボランティアの現場 (NGO、青年海外協力隊、世界のボランティア団体等)、課題を知り、国際ボランティアのポジティブな面及びネガティブな面を学ぶ。グループワークでは青年海外協力隊の要請書等をもとに活動計画を考え、対話形式の話し合いを行う。高知県で活躍する青年海外協力隊OVの特別講演の機会を設け、経験者の声を参考に国際ボランティアの可能性や難しさについて考える。国際ボランティアを切り口に私たちの社会の出来事について考える。
- ② 国際ボランティアについて基本的な知識を身に付ける。ボランティアを受け入れる側の社会の文化はもとより、ボランティアを提供する側の人にも身に付けている文化があることに気づくことを目標とする。

(3) 講義の特徴

国際ボランティア概論は、2016年に開講された。受講生は2016年が180人、2017年が218人であった。2017年の受講生218人のうち、人文社会科学部112人、医学部41人、教育学部5人、理工学部13人、農林海洋科学部8人、地域協働学部36人、その他(土佐さきがけ)3人と全学部から受講生があり、異文化理解、社会経済、医療・看護、教育、環境保全、気候変動、災害対策、農林水産、食糧問題、コミュニティ開発、協働、参加型開発など、多様な学問的背景を持つ学生にとって国際ボランティアは自分の関心からのアプローチがしやすい教科である。

当初の授業計画では、開発途上国で展開されている国際協力のケーススタディを活用したシミュレーション型のグループワークを予定していた。しかし、予想よりも多くの受講希望者があったことから、大人数でも実施できる講義スタイルを模索した。大人数の講義では学生との双方向の対話が少なくなるので、リアクションペーパー(出席票の裏面)上のやり取りでコミュニケーション不足を補った。また、学生の反応を測る

ようなクイズをリアクションペーパーに盛り込み、次の講義の際に学部や性別など属性を変えながら紹介した。そして、そのクイズの結果が講義のポイントに関係するように工夫した。一緒に受講する仲間が質問内容に対してどのような意見や感想を持ったかを共有できたことが、学生の関心を引き付けたようであった。リアクションペーパーは学生が自由に感想や質問を書けるようになっており、はじめのうちはイラスト、講義に直接関係ない質問も多かったが、教員から回答を返しつづけた講義の特徴として、国際ボランティアに関する知識を体系的に伝えるのではなく、学生が事例を聞き、ワークに取り組む過程のなかで自ら気づきを拾い、記録し、まとめるように講義をデザインしたことで、やがて講義の内容やキャリア形成についての質問が寄せられるようになった。

もう一つは資料や映像を繰り返し見ながら、気付いて欲しい、学んで欲しい内容を考えていく方法である。これを講義では国際ボランティア学習における学習態度と視点を身に付けていくための「スパイラル学習」と呼ぶこととした。スパイラル方式の学習法は目新しいものではなく、例えば、ブルーナー(1984:66-69)は『教育の過程』の中でその有効性について述べている。一般的にスパイラル学習は、学習内容に系統性を持たせることで、内容の一部を重複させる教育課程の編成を行う学習方法である。同一の題材を繰り返し学んでいくスパイラル学習は、例えばアメリカの算数の教科書等では一般的な方式として知られている。

少人数で国際ボランティアの事例についてシミュレーションを行うような授業を想定して始めた講義であったが、それが難しい状況の中で、様々な教材の中から自分で学びを「発見」する国際ボランティアにおけるスパイラル学習を導入した。実際、授業に出席していた学生は、回を重ねるごとにワークシートの内容や質問内容の質が向上した。

2. 態度変容と知識

(1) 「セーギの味方」

表2. 囚人のジレンマ

職場であるキャンペーン活動に協力してほしいとたのまれた。その内容は残業を削減しようという内容で総論として賛成できる内容でした。あなたはどのように考えますか？	
①他のみんなも実行するなら、自分も協力してよい。	65
②内容に賛成できるから、他のみんなとは関係なく行動する。	123
③ほかのみんなが実行しないかもしれないので、協力しない。	6
④いろいろ理由を付けて協力しない。	3
⑤その他	2
合計	199
その他(他の者も実行しないでやる気もなければ私が声をかけて、努力と一緒に協力していく)	

授業のはじめに履修学生201人に、国際ボランティアに関するトピックについて感想を書かせたところ、約140人の学生の回答に「～すべき」、「～されることを期待する」、「～であると考える」という傍観者の回答が多く寄せられた。その内容は「正義」や「モラル」に沿った素晴らしい回答である。また、学生に次のような質問をした。「職場であるキャンペーン活動に協力してほしいとたのまれた。その内容は残業を削減しようという内容で総論として賛成できる内容でした。あなたはどのように考えますか」。

これに対して、①他のみんなも実行するなら、自分も協力してよい(65人)、②内容に賛成できるのであるから、他のみんなとは関係なく行動する(123人)、③ほかのみんなが実行しないかもしれないので、協力しない(6人)、④いろいろ理由を付けて協力しない(3人)、⑤その他(2人)であった。その他を選んだうちの1人は「他の者も実行しないでやる気もなければ私が声をかけて、努力と一緒に協力していく」とコメントしている。さて、②が最も多かった回答であるが、いわゆる囚人のジレンマ実験を思い返して見れば、本来であれば①の選択肢が最も多くなりそうである。今回の質問では、あえて、学生が直接経験を持たないであろう「職場」そして「残業」という条件を使った。そして、社会経験のない学生は、職場の同僚の行動とは関係なく「正しい」と思われる行動を選択すると回答した。しかしながら、職場経験をしたことのあるものであれば、②の選択肢が現実的にはそれほど簡単なことではないことに気づくであろう。学生は教科書的な「正義」「モラル」から行動の選択を判断したのかも

表3. 短期間でもいいから住んでみたい国

短期間でもいいから住んでみたい国	票
アメリカ	42
イギリス	24
オーストラリア	23
韓国	11
フランス	11
イタリア	10
ドイツ	10
スペイン	10
カナダ	9
スイス	5
スウェーデン	4
台湾	3
オランダ	3
タイ	3
シンガポール	3
ベルギー	2
ニュージーランド	2
ロシア	2
ノルウェー	2
デンマーク	2
フィリピン	2
トルコ	2
メキシコ	1
コロンビア	1
中国	1
グリーンランド	1
ニューカレドニア	1
フィンランド	1
ベトナム	1
エジプト	1
インド	1
ギリシア	1
パプアニューギニア	1
ケニア	1
イスラーム	1
モルディブ	1
マレーシア	1
日本から出たくない	1
【合計】	201

しれない。つまり、リアルの欠如がある。

次に、学生のリアルを垣間見るために、「短期間でもいいから住んでみたい国」を1か所記入させたところ、アメリカ42人、イギリス24人、オーストラリア23人、韓国11人、フランス11人、イタリア10人、ドイツ10人、スペイン10人、カナダ9人の順であった。その理由としては、「おしゃれである」「カッコいい」「街並みが美しい」「料理がおいしい」「先進的な国である」「発展している」等が挙げ

げられていた。ちなみに、国際ボランティアが派遣されている国としては、タイ、ベトナム、エジプト、メキシコ、インド、パプアニューギニア、ケニア、モルディブ、マレーシアがあったが、理由としては美しい自然や文化遺産が挙げられていた。

こちらは、学生が自分の興味関心から判断した回答であり、開発途上国における国際ボランティアという教科書の世界から抜け出した学生のリアルがある。

亀田(2017)が指摘するように、「正義」や「モラル」という大上段に構えた言葉はしばしば私たちをシラケさせる。法哲学者の井上はこのシラケさせる感覚を「セーギの味方」と表現している。亀田(2017)も指摘しているように、井上の正義論には2つの背景がある。一つは、『正義は個人を超えるか、いわんや「国境」を超えるか』という疑問である。2つ目は『正義に名を

借りた圧倒的な暴力の存在』である。井上（2012）は、『「国境を超えられない正義」の欺瞞と「身勝手に国境を超える覇権的正義」との間の隘路』のいずれにも飲み込まれないように突き抜けて進むことにある危険と覚悟を呼びかけている。

国際ボランティアの入門的な授業としては、「正義」や「モラル」に関する知識よりも、むしろ「共感する力」を重視するよう工夫している。何故ならば、学生にとって講義で紹介する国際的課題や国際ボランティアの事例の多くは、あたかもカフェを楽しみながら目に入ったテレビの画面の情報と大差がないように思われるからである。つまり、自分の日常生活における行動の選択と講義での話や教科書、テレビの向こう側の現実とのリンクが薄いのである。それは、先述のキャンペーンに関する質問で「内容に賛成できるのであるから、他のみんなとは関係なく行動する」と答えた123人の意見からも察することが出来る。それでは、「共感する力」を高める国際ボランティア論はどのように行われる必要があるだろうか。

（2）カリキュラム

15回の講義の内容は、表のとおりテーマ、キーワード、そしてねらいを設けた。国際ボランティアについて考えるうえで必要な知識について、事例から「共感的」に自分で抽出できるように、関連する映画や国際ボランティア経験者の講演を盛り込むようにした。平成29年度に使用した教材映画は第2回の『県庁の星』、第10回の『おいしいコーヒーの真実』、第12回の『クロスロード』、第15回の『ハーフ』である。また、県内在住の国際ボランティアの経験者として、第5回の元南アフリカ共和国派遣の青年海外協力隊員（電気・電子設備）、第9回の元ガーナ派遣の青年海外協力隊員（理数科教師）、第11回の元フィジー派遣の青年海外協力隊員（栄養士）の講演を行った。第3回、第8回、第10回ではそれぞれ、開発コミュニケーション、コーチング、計画立案・評価・モニタリングなど、社会心理学、経営学、プロジェクトマネジメントについて学習を補足するスキルを学ぶ機会を設けた。

表4. 国際ボランティア概論のカリキュラム

	テーマ	キーワード	ねらい
第1回	ボランティアとは	①倫・理(コミュニティの枠組の決めごと) ②ボランティア=自発的+従事する ③ガバナンス/ガバナント	モラルと倫理の違い、べき論を 疑う
第2回	開発コミュニケーション、映画『県庁の星』	①非対称性を乗り越える ②開発コミュニケーション ③映画『県庁の星』	映画『県庁の星』を分析して、「県庁 さん」とスーパーマーケットの 職員とのコミュニケーションの 原因を指摘できる
第3回	身近な異文化間トラブル	①チェンジエージェント、初期採用者 ②態度の変化とその理由 ③国際ボランティアとの関係	映画『県庁の星』を分析した結果 を踏まえて、身近なところから異 文化間で起こる問題について指 摘できる
第4回	国際ボランティア活動	①ボランティア留学 ②青年海外協力隊 ③要請主義	映画『県庁の星』で「県庁さん」が スーパーマーケットに派遣され た時に起きたことを、青年海外協 力隊の活動と関連付けて見るこ とができる
第5回	元青年協力隊員(男性)の 経験から学ぶ(南アフリ カ:電気・電子設備)	①国際ボランティアに参加した理由 ②任地での出来事 ③派遣前と帰国後	これまでの講義で得た知見を生か して、元青年海外協力隊員が 任地で経験したことから学びを 抽出する
第6回	日本以外の国際ボラン ティア団体の活動	①アメリカ平和部隊(ピースコー) ②韓国(KOICA) ③社会活動と評価	他国の国際ボランティア活動と の比較から、日本の社会の特徴 を考える
第7回	ボランティアをする側とされる 側の社会の特徴	①信頼社会と安心社会 ②機会追求型知性と地図作成型知性 ③テフオルト戦略	自分が慣れ親しんでいた行動規 範や考えが果たして他の社会と の出会いによってどう変わるか について考える
第8回	パーソナルタイプを知る	①自分のタイプを知る ②相手のタイプを知る ③チームで課題に取り組む	コーチング研修で使用するテス トを行い、自身及び相手がコン ローラー、プロモーター、アラク イザー、サポーターのどのタイ プに該当するか、お互いとの様 に注意すれば良い仕事ができる かを考える
第9回	元青年海外協力隊員(女性)の 経験から学ぶ(ガーナ:理 数科教師、現青年海外協 力隊監理事)	①帰国後のキャリア ②結婚・出産・育児・キャリア ③国際交流	新年で青年海外協力隊に参加 し、帰国後、結婚・出産・育児 しながら専門職員として県庁で働 いた経験から学ぶ
第10回	それは持続可能ですか? 映画『おいしいコーヒーの 真実』	①消費行動を考える ②フェアトレード ③価値	映画『おいしいコーヒーの真実』 から消費、価値、公正について 考える
第11回	元青年海外協力隊員(女 性)の経験から学ぶ(フィ ジー:栄養士、現高知大学 特任研究員)	①色々な職種 ②高度な業務が求められる ③帰国後を考えながら活動する	専門資格を持って、責任ある学 事をするボランティア活動から学 ぶ
第12回	青年海外協力隊の活動が ら一映画『クロスロード』	①理想と現実 ②共通性 ③意図しない成果	映画『県庁の星』と対比させなが ら、異文化で仕事に取り組むこ とに注意すべき点と考える
第13回	国際ボランティアのシミュ レーション(POM+PEM)	①プロジェクト・サイクル・マネジメント ②プロジェクト・デザイン・マトリックス ③計画立案・評価・モニタリング	課題分析として中心課題を抽出 し、中心目標を設定することが出 来る
第14回	国際ボランティアとキャリ ア形成	①キャリアデザイン ②レジリエンス ③複数のアイデンティティ	両形シートに何を重視して生き ていけるかを踏まえ、自らのキャ リアデザインを書いてみる
第15回	身近な国際ボランティア 映画『ハーフ』から考える	①複数のルーツ ②集団のマージナルな存在 ③コミュニティのルールづくり	複数のルーツを持つ人々の生活 から、コミュニティのあり方を考 える

例えば、映画『県庁の星』は、桂望実の小説（小学館より発行）が原作で、2005年に漫画化、そして2006年に映画化された。

あらすじは、次のとおりである。「Y県庁の産業振興課に勤める県庁の星の野村聡は、Y県職員人事交流研修で民間のスーパーに派遣される。そこでパートタイマーの教育係、二宮泰子と出会う。

そのスーパーでは役人の常識は全く使えず、野村はお荷物とされてしまう。

野村は努力し続けるが、不幸が続く。そんな野村を救ってくれたのが二宮だった。二宮の誘いでO市のデパ地下でマーケティング調査をすると、データでは知れなかった女性の性質に気づかされ、そこから野村は自分が気づかなかったことを次々と気づき、改善し、研修を終える。」

学生は映画の一部を見ながら、登場人物の印象的なセリフややり取りを選んで出席票に記入する。

① よそ者のメリットとデメリット

→県庁第一、頭でっかち、マニュアル人間

- 指図ばかりで自分では行動せず
- ② 受け入れる側のレディネス（準備）
 - 「どうせ半年間のお客様だから」（二宮）
- ③ 仕事の目的やモチベーション
 - 「こんな仕事なら僕じゃなくてもできるでしょう」（県庁 野村）
 - 「報告書を書くために研修に来たんですか」（二宮）
 - 「自分のキャリアに傷を付けるわけにはいかない」（県庁 野村）
 - 「結局自分が大事って話」（二宮）

次に学生は以下の点に注意してワークシートを作成する。

- ① 県庁のエリート野村聡が、スーパーで能力を活かしきれなかったのは何故か（注¹）。
- ② 二宮泰子の果たした役割
- ③ 県庁の業務がスーパーで活かした場面はどんな点であったか。
- ④ 県庁・野村が自分の採用してきた仮説からは見えなかったモノはなにか。

学生のワークシートを教員が分析、整理し、次の講義においてアイデアを全員で共有する。教員は言葉を使い換えたり、言い回しを変えたりするが、基本的に学生から出されたアイデアだけで映像の分析がしっかりできている事を伝える。上記のワークでは、例えば次のようなアイデアが出された。

- ① 「話を通じないなあ」という時、互いの話の前提になっている仮説に注目する。
- ② 互いが使う言葉の定義を確認し合う。
- ③ 相手の立場にたって考えてみる。
- ④ 自分の立場とすり合わせをしてみる。
- ⑤ 互いに同じ土俵を意識して話し合うチャンスをつくる。
- ⑥ 自分の仮説を絶対視せず、他人の仮説を理解しようとする柔軟な態度。

¹ 日本人ボランティアはしばしば「野村」のような立場で任国に派遣される。地域おこし協力隊や日本のNPOの活動等においても同じような状況は起こりうる。

- ⑦ 自分が今まで採用してきた仮説では見えなかったモノについて考える。
- ⑧ トラブルは理解し合うチャンスにもなる。

3. 経験者の話から学ぶこと

（1）自信過剰と低い自己評価

国際ボランティアへの関心について学生（186人）に尋ねると、非常に関心がある（12%）、関心がある（26%）、少し関心がある（38%）、あまり関心がない（19%）、全く関心がない（5%）であった。興味深いことは、多数派（64%）である、関心がある、少し関心があると答えた学生の多くが、実際に国際ボランティアに携わりたいかについて尋ねる問いに対して、「英語力が付いたら」、「機会があったら」、「自分は平凡であるので、もっとできる人がやることだと思う」のような低い自己評価を感じさせる回答が目立った。特に外国語についてコンプレックスを感じている回答が多かった。国際ボランティアは、学業が優秀な人物が行うものと考えている者が多いようである。確かに、外国語の力の有無は、国際ボランティア活動を成功させるうえで重要な能力である。しかし、実際の国際ボランティアの現場では、外国語が堪能なボランティアが活動を成功させていて、外国語が苦手なボランティアが活動を成功させることが出来ないかといえば、そのように単純なことでもない。

そこで、国際ボランティアの事例として、高知県内の高校を卒業後、愛知県の大企業で技術職として働いた後、ふとしたきっかけで青年海外協力隊に参加した男性に経験を話してもらった（2017年5月15日：図1）。彼は正直に「かつては、ボランティアなんてやるのはバカだと思っていた」と語り、しかし、会社の仕事にも慣れ、マンネリ化を感じてきた時にふと参加したボランティア活動で、気持ちがポジティブになったことをきっかけに、青年海外協力隊に参加しようと思った。英語は得意ではなかったが、仕事で身に付けた技術があれば何とかなると飛び込んだのだという。

講演後、学生のワークシートにびっしりと書かれたコメントからは、国際ボランティアが必ずしもエリー

トの活動ではなく、むしろ草の根目線で一緒に考える、特別ではないところから始めることが出来る活動ということが伝わったようであった。

学生のコメントには次のようなものがあった。「教科書よりも、時には草の根の目線がものをいうことがある」、「自分のやりたいことと、相手のニーズがあれば面白いことができる」、「上から目線の口だけでは、皆が耳を傾けてくれないことがわかった」、「ボランティアを始めようと思ったのが、日常のちょっとしたことがきっかけだということに驚いた」、「コミュニケーションは英語だけでなく、距離の取り方や、関わり方なのだと感じた」、「わたしにはもっと勇気が必要だ」、「助けるということ以上に、一緒に何かを共有するということの大切さが分かった」、「言葉も大事だが、それ以上に大事なことがある」、「悩みをぶつけあいながら仲間と活動することは疲れるけれど、すごく大切なことだと感じた」、「ボランティアを通じて人は自信や喜びを得るのだと思った」、「外国語はツールだと感じた。使う場所があって役に立つし、役に立つ言葉を学べる」、「人は限られた環境の中で工夫することで色々なことを考えるのだと思った」、「してあげるという態度ではなく、ボランティアをする側もされる側も共に成長できるのだと思った」、「若くて国際ボランティアに従事している方は、きっと最初から強い意志を持った、英語がペラペラな人というイメージが自分の中にありました。しかし、面白さや好奇心を原動力に現地に出向き楽しんでくる方法もあるのだなと思った」、「経験という世界に飛び込んだことに率直に敬意を持った」、「音楽やスポーツなど自分の得意とすることをきっかけにして仲間になっていけばいいのだと思った」、「わたしは失敗することが怖いと感じていたけれど、失敗やカルチャーショックを体験するために国際ボランティアに行ったということがすごい」、「会社を辞めて行っただけのことがある、素晴らしい体験をされたと思う」、「ボランティアなんて面倒だろうなと思っていたが、自分もやってみたくなくなった」、「自分には国際ボランティアなんて無理だと考えていたが、少なくとも自分もチャレンジしても良いんだと思え

図1. 講演会（南アフリカ派遣青年海外協力隊員）

平成29年度 国際ボランティア概論 特別講演会
国際ボランティアの醍醐味は帰国後から！
「想像していた以上に、帰国後が楽しい」

WE ARE FRIENDS (SIBANGANI)

講演者への参加の理由は、祖国のカルチャーショックを求めて、日本で暮らした自身の価値観の修正をすることが、今後の人生に非常に大きな意味があると思ったから！

帰国後の赤口はやはり草の根まで踏み込まないとなかなか見えてこない。学んだことは、机上ではなく現場という草の根目線の大切さ。祖国の方との繋がりを大切にしながら、自分を含め多くの方の協力体験を高知・四国の元気に変えていきます！

講演者：猪野 孔太 氏
 高知県出身
 高知県青年海外協力隊員（VCA）会長
 高知大学国際ボランティアセンター副会長
 2011年～2013年（電気・電子機器）

4月15日（月）
 午後2時30分～4時20分
 高知大学 国際ボランティアセンター 210号室

留学生以外で参加ご希望の方は下記のメールアドレスにご一報ください。定員に余裕のある場合は、当日参加も可能です。

高知大学 安全・安心機構 准教授 猪野 淳一
 〒780-8520 高知市環町二丁目5番1号
 電話 088-888-8020
 FAX 088-888-8023
 電子メール hirose-junichi@kochi-u.ac.jp
 URL <http://www.kochi-u.ac.jp/sankaku/>

た」、「自分は何に怖いと思っているんだろうと考えてしまった」、「青年海外協力隊になるには語学の試験が難しいと思っていたが、想いと技術五輪のような技術があれば夢が叶うんだなあとと思った」、「無理だから止めるのではなく、どうやってやろうかと考えるのがすごい」、「ボランティアを始めたきっかけが、私自身の生活とかけ離れているわけじゃなく、私にも起こりえるようなきっかけでおどろいた」。

(2) 国際ボランティアとキャリア

学生の多くは、就職活動を控えて初めて具体的にキャリアについて考えることになる。共通教育科目として開講されている国際ボランティア概論ではほとんどの学生を1年生が占めている。講義の冒頭で、学生が仕事を選ぶうえで重視することを3つ挙げてもらったところ、「職場の雰囲気（128ポイント）」、「給料（126ポイント）」、「誰かの役に立つ（71ポイント）」、「休暇の取りやすさ（71ポイント）」であった。また、キャリアに対する記述からは、学卒後に就職した職場で定年

まで勤めることが理想、地元志向の強さがうかがわれた。また、両親の職業、仕事に対する考え方が無意識レベルまで影響していることが読み取れた。また、「給料」を選んだ学生で、「夢の実現に近づく」、「誰かの役に立ちたい」を選択している割合は少なく、具体的な職業を思い描いているというよりは、職業のイメージが少ないために仕事を選ぶ上での「給料」が占める割合が大きくなっていると思われる。いずれにしても、両親や親戚など身近なロールモデルの存在が自身のキャリアを考えるうえで重要な情報になっていることがわかった。

そこで、高知大学男女共同参画推進室が行っている「ロールモデル講演会」のスキームを活用して、国際ボランティアとキャリア形成に重点を置いた講演を実施した(2017年6月26日：図2)。講師は、高知大学農学部を卒業してすぐに青年海外協力隊に参加し、ガーナ共和国に理数科教師として派遣された。新卒で国際ボランティアに参加したため、「走りながら考えた」活動になったという。その経験が自らのキャリアを考えるアンカーともなった。帰国後、結婚、出産し、育児をしながら公務員採用試験を受験した。ガーナでの経験から、農業や食糧に関係した職業に就きたいとの思いがあった。見事、高知県庁の農業専門職員として採用され、高知県農業大学校の教員の時に定年退職した。採用された当時は、育児と仕事の両立を支援する制度もなく、周囲からの応援と工夫で乗り切った。

講演を聞いた学生の感想には、「1970年代のガーナの方が現在の日本より女性が管理職として働きやすい環境が整っていて驚いた」、「開発途上国の生活について思い込みが多かったと感じた」、「ガーナでは女性が家にいて子どもの世話をしなくてはいけないというような固定概念は強くないのだと思った」、「日本で生活する自分の価値観が普遍的ではないのだと改めて考えた」、「世間の目に囚われるのではなく、自分の眼で見て考えて判断することが大切」、「外国から日本を見ることで、社会や自分自身が良く分かるのかもしれない。自分も外国から日本を見てみたい」、「時間の流れや、大事にしたいものも実は住んでいる社会の常識に影響

表5. キャリアで重視すること

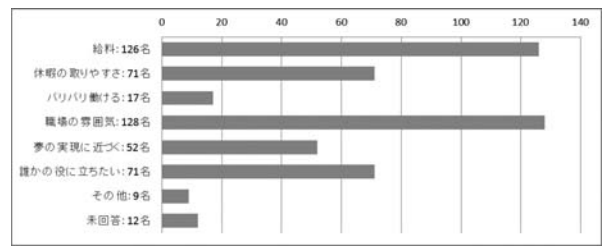


図2. 講演会（ガーナ派遣青年海外協力隊員）



されすぎている。何のために働きたいか、一度外国で考えてみたい」、「アフリカの人は暑い昼間でもバリバリ働けると思い込んでいた。涼しい時間帯に働くのだ」、「青年海外協力隊員が過去50年に4万人が88か国に派遣されていたと知り、思っていたよりも多くの人が経験していると思った。そして様々な職種で日本や世界で活躍している」、「勉強するのに場所は関係ないと知り、自分も高知大学でできる限り勉強しようと思った」、「ステレオタイプに振り回されて将来を考えたら、自分のチャンスが少なくなると思った。色々チャレンジしてみたい」、「大学入試がゴールみたいになっていたので刺激を受けた」、「ガーナの人は明るく楽しそうな印象を持った」、「途上国から日本が学ぶこ

とは沢山ある」、「県庁を定年退職後も3つの団体で活躍していてすごいと思った」、「ガーナでの経験が高知で活かされていて、いろんなことがキャリアにつながるのだなあと感じた」、「海外での経験を活かしたキャリア形成にとっても興味を持った」、「日本では育休が取りにくい職場があると聞きます。ガーナでは家族や周囲の人の協力で女性の職場復帰も早く、管理職に就く女性も多いと知り、うらやましいと思いました」、「蛇口をひねったら水が出る便利さと、いろいろ不便だけれど笑顔で助け合って暮らしている人はどちらが幸せかは比較できないと思った」、「日本で核家族化や地域とのつながりが減ってきている中で、ガーナの人たちの生活は人の温かさやゆとりが感じられました。アフリカがただ貧しい社会というのは自分の偏見でした」、「ブラック企業の問題が報じられるなか、お互いを尊重して気持ちよく働ける職場を探したい」、「日本の外にはいろんな国があり、いろんな人がいると聞いて、その通りと思った。ひとつの価値観に盲目的に縛られる必要はないんだと思った」、「時間は過ぎてしまえばとても短いものだとおっしゃっていました。その通りだと思いました。一生懸命やるのが大事だと思いました」、「地域全体で子育てする。大切なことだと思った」、「女性管理職が多いというところに高知県との共通性を感じた」、「青年海外協力隊の経験が県庁で活かされていて、色々なキャリアがあることを知った」。

講演会の学生のコメントからは、「給料」とは別の働く基準へのヒントが見つかった様子がうかがえた。

(3) 専門的知識を活かす

ロールモデルは学びやキャリア形成にとって役立つ存在である。ここでのロールモデルは、等身大の国際ボランティアをするためのロールモデルと、自分のキャリア形成を視野に入れたロールモデルの2種類が重なっている。国際ボランティア概論は、医学部看護学科、農林海洋科学部、理工学部の学生も多く、専門的な領域における国際ボランティアの事例に触れることは学生が具体的なイメージを持つうえで有効である。

そのような目的を踏まえ、管理栄養士という専門的資格を持ち、フィジー共和国に青年海外協力隊員として派遣された女性を講師に招いた。現在は高知大学医学部で特任研究員として活躍している。青年海外協力隊の活動紹介といえば、とにかく異文化の現場に飛び込んでみて、体力勝負で試行錯誤してみようという内容のものが多い。そのため、国際ボランティアといっても「しごと」の要素が強い活動を知ってもらうことで、国際ボランティアに対する認識を広げてもらうことを目的とした講演会を行った(2017年6月12日:図3)。

彼女のフィジーでの配属先は中央政府で国民の栄養状態に関する調査や啓蒙活動を行う。また、国際機関からの援助を受けているプログラムを担当しており、業務の進め方はボランティアといえども計画通りに事業を進めて成果を出す必要のある厳しい仕事である。この業務には、栄養士としての専門的知識のほか、フィジーの官僚や国際機関の職員とのコミュニケーションが不可欠であり、相応の経験やスキルが求められる。

図3. 講演会(フィジー派遣青年海外協力隊員)

平成29年度 **ロールモデル講演会**
Let's just try!
〜いつか...と思っていたら結局やらないまま終わってしまう。
やってみたい、と思っている今、挑戦してみたらどう?〜

日時:平成29年6月12日(月)
14時50分~16時20分
場所:高知大学朝倉キャンパス210番教室
対象:学生・教職員・一般

森 温子 氏
高知大学医学部 特任研究員
元フィジー共和国派遣青年海外協力隊

男女共同参画推進室では、学生のキャリア支援の一環として、ロールモデル講演会を実施しています。今回は高知大学医学部特任研究員の森温子氏に、青年海外協力隊員としてフィジー共和国で栄養士の活動に従事し、その経験やどのようにキャリアを組立ててきたかについてお話をうかがいます。

参加ご希望の方は男女共同参画推進室まで下記のメール又はFAX、電話で、ご氏名・ご所属(外部の方は一般で構いません)をお知らせのうえお申し込みください。定員に余裕のある場合は、当日参加も可能です。

高知大学男女共同参画推進室
しあわせさんたん
〒780-8520 高知市樋町二丁目5番1号
電話 088-888-8022
FAX 088-888-8023
電子メール sankaku@kochi-u.ac.jp
URL <http://www.kochi-u.ac.jp/sankaku/>

よって、ボランティア派遣であるが、求められる成果は責任ある仕事そのものである。日本で働いているように、それ以上にプロジェクトの管理、計画的な実施が必要である。国際ボランティアは、自分の「やりたい」と相手のニーズのマッチングが重要であり、様々なニーズが世界にあることについて学生は耳を傾けた。

学生の感想には、次のようなものが寄せられた。「食をキーワードにした国際ボランティアがあるのだと知って視野が広がった」、「自分の得意なこと専門的知識を持って国際貢献することに感銘を受けた」、「専門的な技術を持ちながら、宗教や民族の特徴に沿った栄養指導を考えていてすごいと思った」、「フィジーは多民族国家で宗教上の理由で食べられない食材の代替りの代替食品を探す様子が興味深かった」、「外国の食事を研究することが出来て楽しそう」、「砂糖に対するあこがれが大きい国でカロリー摂取指導は難しいけど、やりがいがある活動だと思う」、「問題が次から次に発生して大変そうだったけれど楽しそう」、「食文化というローカルな課題に取り組むのは大変だけれど、現地の同僚と一緒に仕事ができることで面白い活動だと感じた」、「自分ひとりで動かず、チームで動く方針を守っていたことで、プロジェクトが成功しているように思った」、「ひとりひとりしあわせの形態は違うけれど、何が自分にとっての幸せか考える機会になった」、「しあわせは色々なことから感じる事が出来る」、「分かりやすく伝える、周りを巻き込む、英語だけではなく英語は必要だと思った」、「どんどん新しい知識を勉強しないと現場に対応できない。勉強は必要だ」、「ベジタリアンなど宗教や文化を理由とする食生活で栄養失調になっている人たちへの栄養指導など難しいけどやりがいがある」、「デザインやキャッチフレーズなど、相手に伝わることを考えることは面白そう」、「挑戦を楽しんでいる様子が伝わってきた」、「ハード面も大事だけれど、それを使いこなすソフト面を考えるとの重要さがわかった」、「『なぜ?』の重要性が分かった。自分が話すときは『なぜ』が伝わるように話し、相手の『なぜ』を理解しようと心がけます」、「現地の

言葉で説明するには現地の文化を理解する必要があると思った」、「すべての工程でフィードバックをして経験を共有しているところがすごい」、「現地の人とよく話し、同僚とよく話す。コミュニケーションが重要」、「現地での経験が自分の専門性を高めていてボランティアとキャリアの関係が良くわかった」、「何度も何度も地道に作業を繰り返す努力が大事だとわかった」、「技術や知識を提供するだけでなく、そこでみんなと共有するなかで新しいものを生み出すことが出来る。すばらしい」、「青年海外協力隊は色々な職種の人が活躍できる場があることがわかった」、「ただ指導するだけでなく、何度も何度も振り返りの機会をつくって見習いたいと思った」、「活動の中で考えたり集めたりしたデータを使って新しい提案をプレゼンするなどすごい」、「健康や栄養状態は人間の文化と関係が深いことが興味深かった」、「自分の専門性を活かすボランティアであることを改めて感じた」、「国際ボランティアでは様々な分野の専門性が必要とされているのだと思った」、「国際ボランティアという紛争解決とかが中心と思っていたので、食生活とか身近なことで貢献できることは素晴らしいと思った」、「計画的にきっちり仕事をこなすことで信頼が得られると思った」、「栄養改善に取り組むボランティアがあることに驚いた」、「ボランティアの任期が終わった後の職探しを考えると、ボランティアへの参加を躊躇していましたが、それ以上に得られるものがあると考えました」。

この講演では、学生はボランティアがよりプロフェッショナルな姿勢が求められること、そして働き方を含めた経験がその後のキャリアにとってもプラスにすることができるものであることを認識したようである。

4. 自分で発見する学びの価値

(1) 活動主体についての気付き

「セーギの味方」的な話になると、私たちは一種のシラケを感じるが、「正義」、「モラル」について質問されることがあれば、どのように応えることが自分の社会にとって好まれるかについて知っている。そうであ

るので、「セーギの味方」的な質問に対しては学生の答えも当たり障りのないものになる。しかし、そこには「主体」も「客体」も影をひそめ、「行政はしっかり考えるべきだ」、「私たちは気づくべきだ」といった、誰かが責任を負うようであり誰も責任を負わない選択を選ぶ。そこで、国際ボランティア概論では自分、相手の存在を意識するためのワークを導入している。例えば第8回の「パーソナルタイプを知る」と第13回の「国際ボランティアのシミュレーション」である。「パーソナルタイプを知る」では、コーチング教育で利用する心理テストを応用した問題を使い、学生が特徴に応じてそれぞれ「コントローラー」、「プロモーター」、「アナライザー」、「サポーター」に分類した(注²)。今回の結果はコントローラー42人、プロモーター29人、アナライザー48人、サポーター73人であった。そして、それぞれのタイプの特徴、得手不得手について紹介すると、多くの学生は「当たっている」「そんなに当たっていない」と言ってざわつく。そして、近くに座っている学生とお互いのタイプを見せ合い、話し合う。タイプが当たっているか、そうでないかはともかく、チームワークを必要とするプロジェクトの実施では、自分はもちろんメンバーの働きが効果的に活用されるためにはどのように工夫すべであるかを意識するようになる。

次に、第13回の「国際ボランティアのシミュレーション」であるが、ここでは「PCM (Project Cycle Management)」と「PDM (Project Design Matrix)」という国際協力における課題の発見とプロジェクトの設計、管理実施について実践的に学ぶ。この手法は特にボランティアとして配属された職場の同僚と一緒に作業をするコミュニティメンバーと課題認識、プロジェクトの目標、実施工程、進捗状況、責任の所在について共有するために効果的な方法である。先述した「ロールモデル講演会」の話にもあったように、自分のやりたいこと、自分の想いだけではなく、実施に際しての経済的・社会的負担、責任の所在、実現可能性を

踏まえたうえでの「相手の想い」に配慮したプロジェクト形成である。

学生のワークシートからは、「自分のやりたい」を想いに任せて進める強引さだけではなく、冷静な思考が働いている様子が見てうかがえた。例えば、この集落には「病院がない」からといって、プロジェクトで「病院をつくる」とせず、「適切な医療を受ける機会が持てる」と目標設定し、巡回診療やICTを活用した遠隔診断など代替的な計画案が提案されるようになった。

(2) 効果測定

この講義では、1 (2) で紹介した評価課題について、教えられるのではなく自分でたどり着くことを目標とし、繰り返し行われる事例報告や講演内容から抽出することになる。その効果については、例えば、第12回の映画「クロスロード」を使った講義を行った。映画「クロスロード」はリアルな青年海外協力隊員たちを描いた青春グラフィティ。監督はすずきじゅんいち、脚本・脚本監修は福間正浩で共に青年海外協力隊に参加した経験を持つ。カメラマン助手になったものの、目標の見えない日々を過ごしていた沢田は、自分を変えようと青年海外協力隊に参加する。しかし、訓練所でもボランティア精神を地で行く羽村と対立したり、規則を破ったりと、何かと問題を起こしてしまう。彼らの仲を取り持つ助産師隊員の志穂と共にフィリピンに派遣される二人。沢田は観光省での仕事に不満を抱くが、羽村は失敗しながらも田舎の村でドジョウの養殖を順調に進めていく。そんな優等生タイプの羽村を沢田が好きになれないのは、反発していた亡き父の面影を見るからだ。ある日、野心的な写真を撮ろうとバギオの街を訪れた沢田は少年ノエルと姉のアンジェラと出会い、この国の現状に胸を痛めるが、無力感のうちに帰国する。それから8年、協力隊での体験は二人をどう変えた(注³)。

学生のワークシートから課題分析の結果を見ると、「セーギ」やモラルだけではなく、草の根の視点からプ

² コーチング・タイプ分析については、例えば次を参照願いたい。
<https://www.coacha.com/type/> (2017年9月17日アクセス)

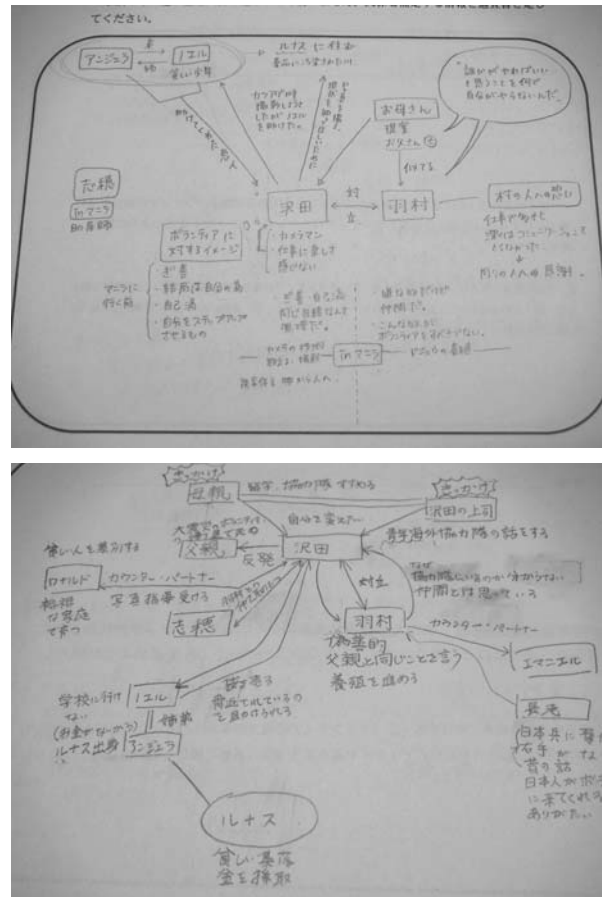
³ <http://crossroads.toeiad.co.jp/>

プロジェクトを観察している様子が見てとれる。

おわりに

本稿では、高知大学で共通教育科目として開講された「国際ボランティア概論」における講義の試行錯誤から、知識を「知っている」ことを超えて、知識のリアリティを得て態度や行動の変容に繋がるような授業のあり方について考えてきた。この講義には、人文社会科学部、教育学部、医学部、農林海洋科学部、理工学部、地域協働学部など様々な学問的関心や経験を持つ学生が参加する。また、国際ボランティアという分野横断的な活動領域に関するテーマである事から、特定の学問領域に偏るような講義は避けたいと考えた。そこで、国際ボランティアについて考えるに必要な態度や行動を刺激する内容の講義にしたいと考えた。しかしながら、国際ボランティアは、「正義」や「モラル」そして「貢献」のような、ともしれば大所高所からの視点に囚われがちな領域である。本文でも述べたように、このような大所高所の視点には「セーギの味方」論のような「シラケ」が生じる。また、少人数でのゼミナールやグループワークのような教授形式であればフォローアップできるところも、200人以上の講義においては難しい。そこで、ある程度大人数の座学中心の講義であっても、態度・行動変容を促す教育方法として、適切なヒントを与えながら、繰り返し提供される映像や講演から少しずつ、重要なポイントに自ら気づくことを促すことにした。結果として、知識を暗記するような方法とは異なり、国際ボランティア論に必要な視点からものを見て考える経験は出来たのではないかと思われる。また、国内の身近にいる外国人や複数のルーツを持つ者に対する関心が芽生えていることがうかがえるコメントも増えた。この方法はまだ試行錯誤で行っているが、今後、学生のリアクションをよく分析して、効果的な教育方法の開発に行かしていきたいと思う。

図4. 「クロスロード」ワークシート



参考文献

1. 井上達夫、1986年、『共生の作法－会話としての正義』現代学芸自由叢書
2. 井上達夫、2012年、『世界正義論』筑摩選書
3. 亀田達也、2017年、『モラルの起源－実験社会科学からの問い』岩波新書
4. 齊藤和志、1992年、「態度変容過程における自己決定」『愛知淑徳短期大学研究紀要』第31号 pp.195-208
5. J.S. プルーナー（著）、鈴木祥蔵・佐藤三郎（訳）（1984年）『教育の過程』、岩波書店
6. 杉浦義典、2015年、『他人を傷つけても平気な人たち：サイコパシーは、あなたのすぐ近くにいる』、河出書房新社
7. 中野信子、2017年、『サイコパス』、文春新書